



247号

2019/10

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



道路掃除のおばさん：四川省チベット族の街「稻城」。標高 3700m を超える高地なので 7 月ともいえ寒い。早朝の散歩に出ると見かけるのは掃除のおばさんたちのみ。朝の散歩に出ると中国各地でよく見る働き者達だ。カメラを向けて可否を問うと、はにかみながらこちらを向いた。（四川省稻城にて 2019 年 7 月 佐々木健之撮影）

‘わんりい’ 2019 年 10 月号の目次は 20 ページにあります

この言葉、日本では、「男子、三日見ざれば、刮目してみるべし」と言い慣わしています。

・>・>・>・>・>・

三国時代、東呉の大將呂蒙は勇敢で戦上手、呉王孫権に重用されていました。呂蒙は家が貧しくて、学問をする機会に恵まれませんでした。孫権に勧められて勉強を始め、学識を積んでいきました。

ある時、軍師魯肅が呂蒙の駐屯地を訪れ、呂蒙が歓迎の宴を催しました。席上、呂蒙は彼の見解を披露しました。魯肅はそれを聞いて、非常に敬服し言いました：「以前、私は呂蒙將軍は戦が上手なだけの方だと思っておりました。学識、策略共に随分進歩されましたね。」と言いま

した。それを聞いた呂蒙は笑って言いました：「人間は、努力をして研鑽を積み進歩するものです、いつまでも昔の儘と思わないでください。」

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：刮目＝目を見開く、見方を改める；看＝取り扱う、待遇する。意味は、昔の眼鏡で他人を量らず、新しい見方をしなくてはいけない、と言う意味。

使い方：彼は努力をして、前回「不合格」だったテストの成績を「優秀」にまで高めたので、クラスの皆は彼を見直した。

・>・>・>・>・>・

人間は進歩出来るのだから、レッテルを張ってはいけないということですね。しかしこれはかなり難しいことです。とかく人間は、過去の経歴で他人を判断しがちですから。

日本の社会では、今はだいぶ良くなっているとは言われますが、経歴上、何か躓きがあると、再起は非常に難しいと言われます。特に官僚と言わ

れる人々は、出世コースを歩めなくなると言われます。

随分前になりますが、新聞紙上を賑わせた事件がありました。詳しいことは忘れましたが、某県の警察本部に、警察庁から新しい本部長が着任しました。県警の交番勤務の巡査が家庭の事情に起

因する不祥事を起こし、管轄する警察署の署長、副署長がそれを隠蔽しようとして、更に大きな不祥事になってしまったことがありました。

署長や副署長の動機は、新任の本部長のキャリアに汚点を付けないように、ということでした。勿論そこには自分達の保身もあったことでしょうが、外部の人間にとっては、不思議に感

じ、理解できないことばかりです。

上に立つ人が部下の仕事にも責任を持つのは、形式としては当然と言えますが、この場合は、採用に関わってもいない、何千人もの巡査の中の一人の、しかも家庭に由来する不祥事で、本部長の経歴に傷がつくというのは解せません。

しかし現実には、このようなケースでも県警本部長の経歴上の不祥事となり以後の出世に差し障るのだそうです。一般的に言えば、部下に不祥事があった場合、其の事例を如何に処理するかで、その人の資質が評価されると思うのですが、実際は任期中に不祥事が起こったことがその人の経歴上の不祥事とみなされるのです。それで、保身のために何もしないリーダーが育つのでしょうか。

この点、日本はとても遅れていると思います。その人の経歴書を見るのではなく、その人が問題にぶつかった時の対処の仕方を見て、品格・資質が判断されるような文化が育って欲しいと思います。



挿絵 満柏氏

Qún ér bù dǎng
群而不党

群して党せず〈衛霊公第十五〉

桜美林大学名誉教授 植田渥雄



漢字には、似た意味を表わす文字がたくさんあります。『論語』に、「君子和而不同，小人同而不和（Jūn zǐ hé ér bù tóng, xiǎo rén tóng ér bù hé）」（君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず）〈子路第十三〉という有名な一節があります。この文全体の意味から切り離して「和」と「同」二つの文字を比較してみると、いずれも同じような意味を持っていることがわかります。例えば「付和雷同」。付和も雷同も世間の趨勢に無条件に同調することを表わしています。

しかし場合によっては意味が異なるばかりか、まるで正反対の意を表わすこともあります。「和而不同」（和して同ぜず）「同而不和」（同じて和せず）はその顕著な一例です。この場合の「和」とは、異なったもの同士が調和することを言います。これに対して「同」とはすべてが一致することを言います。『論語』ではこの両者の微妙な差異を「君子」と「小人」という全く正反対の概念に当てはめて説いています。つまり、すべての面で相手に同一性を求め、それを拒む者を排除するのは賢い人間のすることではない。相手の異質性とどう向き合い、どう調和を図るか、それこそが肝要だと説いているのです。漢字にして僅か12文字。それでいて人間関係から国際関係の在り方までを、見事に言い尽しています。

これに似た表現が表題の「群而不党」です。全文は次のようになっています。「君子矜而不争，群而不党（Jūn zǐ jīn ér bù zhēng, qún ér bù dǎng）」（君子は矜にして争わず、群して党せず）〈衛霊公第十五〉。君子、つまり指導力のある人間は、誇り高いが争いごとはしない。「矜」とはプライドが高いことです。プライドが高いこと自体は良いこと

ですが、そういう人はとかく争いごとに巻き込まれやすい。高いプライドを保ちつつ、しかも争い事にも加わらない。それが君子だということです。

また「群して党せず」とは、群れをなすが徒党を組むことはしないということです。「群」の原義は羊が群れをなすことを表わしています。羊の群れはおおよそ自由で無秩序に見えますが、羊飼いを中心に一定の秩序が保たれています。こういう自由で且つ秩序ある集団をつくるのが君子だということです。「群」の文字は、現代的用法としては「群集心理」などの語が示すように、時としてマイナスイメージを持つことがあります。『論語』に関する限りそのイメージはありません。

これに対して「党」は党派を組むことです。党派を組むことは必ずしも悪いことではありません。「党」はもともと行政単位を表わす語で、五百戸の小集落を指していました。『論語』でもこのような意味合いで使われている場合が何か所かあります。ところが一方、親戚、朋友等、小規模の私的集団を表わすこともあります。そしてこの私的な集団が公的な政治の場に紛れ込むと、一転して悪党集団に変わることもなります。「群党」という言葉が示すように「群」も「党」も集団を表わすという点では同義語もしくは類義語ですが、その使い方によっては反義語にもなるわけです。

『論語』は一見、片言隻語の寄せ集めのようにもみえますが、このような言葉の微妙な異同を利用して、絶妙なレトリックを組み立てた書物でもあります。これも『論語』の魅力の一つと言えるでしょう。

（わりい「中国語で読む漢詩の会」講師）

「遼陽」という街 (その2) 寺西俊英

私が初めて遼陽に行ったのは、大連に赴任した翌年の2008年夏でした。中国人の友人が「歴史の好きな貴方を案内したい街がある。さほど有名ではないけどね。」と言うので誘われるままに行ってみました。それが遼陽だったのです。遼陽という街はもちろん知らなかったし、歴史上何が有名なのか知りませんでした。ただ、日露戦争で確か「遼陽の会戦」があったな、という程度でした。当時は、高鉄は走っていませんでしたので在来線の遼陽駅で下り、そこからぶらぶら歩いて行くと遠くに目立つ塔が見えてきました。近くに行くと見ると、大きなお寺のある広い公園の一角に一風変わった形の塔がありました。どっしりと重厚な感じですが、優美で美しいこの塔に一目で惚れてしまいました。青空にスクッと天を突くように立っている姿は神々しささえ感じさせます。これが遼陽のシンボルである「白塔」でした。今回は、「白塔」にスポットライトを当てて書いていきます。

ここで白塔の歴史を振り返って見ましょう。前号でも簡単に紹介しましたが、女真族が建てた「金」という国のお話です。当時東北地方は遼（契丹族の王朝、916年～1125年）が支配していて女真族はその支配下にありました。しかし遼の圧政に耐え兼ね完顔阿骨打が反乱を起こし、ついに遼を追いやり東北地方を勢力下に置きました。そして1115年に建国し国号を金としたのです。「金」という名前は本拠地としていた地方に砂金が採れたため、と言われていました。首都は初め会寧（黒竜江省）に置き後に燕京（今の北京）に移しました。副都は遼陽としました。金は初代の太宗から10代続きましたが、1234年にモンゴル（元）に滅ぼされます。白塔は第5代皇帝の世宗（完顔烏祿）が建立しました。彼の母は貞懿皇后といい、遼陽の人で一族の完顔宗堯の側室でした。1135年に宗堯が亡くなると再婚を拒否し出家。燕京から遼陽に戻って清安禅寺を建ててもらいそこで夫の菩提を弔っ



遼陽の「白塔」（遼陽市人民政府ホームページより）

たのです。その美しく賢明で貞節を守った母は、1161年に世宗が即位した年に亡くなりました。世宗はその死を悼み、白塔を建てて厚く供養したのです。因みに貞懿の〈懿〉は、yi と発音し、美しいとか良いという意味です。いい名前ですね。

白塔は写真を見ていただくとお分かりでしょうが、高さ70.4メートル、八角形の13層から成っています。1161年（母の亡くなった年）～89年の創建です。28年もの歳月をかけて造っていますが、母への思い入れの深さが分かる気がしますね。レンガ造りで何度も改修されていますが、830年経った今でも創建当時の面影を留めているそうです。塔身の八面に座仏、脇侍、飛天などの彫刻が彫られており、全体の造型と一部の彫刻は芸術的な水準が高いそうです。飛天とは仏教で諸仏の周りを飛行遊泳し礼賛する天人で、白塔の壁面には艶やかに飛んでいる姿が生き生きと彫られています。多くは羽衣をまとっているため天女とも呼ばれています。後年南面には、50センチ四方の大きさに「流・光・碧・漢」の四つの金文字が掲げられました。意味するところは、「流光＝仏光が溢れ出て普く世の中を照らす。碧漢＝緑色の天空のことで、仏教の極楽世界を描いている」ということです。塔頂は、銅製の五個の宝珠と火炎、相輪などでできています。白塔は、広佑寺塔の俗称だそうで当初は漆喰のようなもので白く塗られていたと

ころからこの名が付きました。今は年月が経ち、見る角度や時間帯によって灰色に見えたり茶色っぽく見えたりと、白いとはお世辞にも言えませんが、なぜか私には「白塔」という呼び名がぴったりする気がするのです。ネットを見ると中国には白塔と名の付くのは七座ある（チベット仏教系の白塔ではない）と書いてあります。北京の北海公園の白塔は見たことが有りますが実際に白い色をしていますね。中国全土には歴史ある古塔は76座あり、高さではその中で2番目に高いそうです。遼陽の白塔の形は、契丹族が創造し、明代まで河北から内蒙古、遼東にかけて伝播したようで、遼寧省の錦州市にある「大広濟寺塔」や内モンゴルの「大明塔」等も似た形をしています。因みに西安の有名な大雁塔は、高さは64メートルですが、一口に古塔といってもいろいろな形があります。

話は変わりますが、手元に与謝野晶子と夫の寛が書いた「満蒙遊記」のコピーがあります。二人は1928年（昭和3年）5月5日から6月17日にかけて旧満州・内蒙古を旅しました。今からちょうど90年前のこの旅行は満鉄の招待の為、費用の心配は要らず歌だけ詠めばよいとの破格の条件でした。満鉄は毎年文化人や芸術家を招待し、宣伝活動を積極的に行っていたのです。この時期の満州は丁度柳絮が飛び交い、アカシアの白い花が咲き乱れるという美しい自然のなかで旅をつづけたのです。5日に東京を出発、6日に神戸から船に乗り、門司で碇泊後大連に向かつて出港し9日に到着しました。旅順、熊岳城、東北地方の四大名山の一つである千山などゆっくりと見物し、歌を詠みながら初めての中国を楽しんだのです。そして5月21日に遼陽駅に降り立ち、数日友人たちと交流し、案内してもらいました。満蒙遊記の「遼陽」の項を見ると次のように書かれています。

〈満州に現存する都市で最も古いのは奉天省の遼陽である。「漢書地理誌」に載せた「襄平城」が今の遼陽城であることを「遼東文献徴略」の著者が考証してゐる。～中略～それが有名な遼陽の白塔

である。私達は主としてこの塔を観たいために、満鉄本線の遼陽駅に下りた。〉

この書の内容は、殆ど晶子が書いたそうですが、博識に加え事前の下調べを十分に行った節が随所に見られます。引用した文にあるように「有名な遼陽の白塔」とあるので当時の文化人の多くはこの塔のことは常識だったのではないかと思います。そしてその塔を観るのが第一目的で遼陽駅に下りたわけですね。この塔については次のように書いています。

〈白塔は駅に著く一里前から既に平野の上に望まれたが、駅前の広場に出ると、その薄白い優雅な円みある姿が、公園の楊柳の上から私達に会釈の微笑みを送るのであった。～中略～塔は度々の修理を重ねたものであらうが、久しい間の風雨に曝されて可なり破損してゐる。殊に上層は幾百羽となく岩燕の大群が巢を作って、その周囲に飛翔している。初夏の温和な青空の下で夢のやうに飛ぶ柳絮の風に吹かれながら、この廢残の古塔を見上げるのは淡く哀しいやうな一種の快さであった。〉
如何にも女性らしい視点で書かれていますね。寛が書いた序文には一か月半の旅行で、二人で千首近い短歌を詠んだと有り、すべてを見ることはできませんがその中で一首ずつ遼陽での短歌を紹介します。

〈寛〉 遼陽の駅に下ればしろき塔

月の明りを柳にぞ置く

〈晶子〉 温泉の柳絮古城に見し柳絮

遼陽県に散るなる柳絮

私がこの塔に惚れたと書きましたが、何となくお分かり頂いたでしょうか。晶子は柳絮がかなり気に入ったようですね。近い将来にまた雄姿に会いに行こうと思っています。なお二人の旅行ですが、実は旅行中の6月4日、滞在中の奉天（瀋陽）で張作霖爆殺事件が発生し、北京行きを断念したことを付記します。 （続く）

（注：『満蒙遊記』からの抜粋は、原文の通りに転記した）

陸游の卜算子「詠梅」

報告：花岡風子

今日のお題は南宋の詩人、陸游^{ぼくさんし えい}の〔卜算子〕^{はい}〈詠梅〉でした。こころ新たに令和を迎えた今の日本人にとって、梅の歌といえば、『万葉集』が思い浮かびますが、これは万葉の時代から更にずっと下って、今から 800 年ほど前に作られた作品です。梅はまだ雪の残る寒い時期に、どの花よりも早く花を咲かせます。中国人は古代からそんな梅を愛でてきたのですが、陸游もまた、とりわけ梅を愛したようです。梅を題材にした数ある陸游の作品の中にあって、その不屈の人生を下敷きにしたこの作品は、この詩人の真骨頂といえるものだそうです。

陸游は、1125 年生まれ。85 年の生涯にほぼ一万首の作品を残し、南宋第一の詩人と言われます。彼はまた気骨のある抗戦派の愛国詩人としても知られています。地方官で徹底抗戦派の父陸宰^{さい}が、家族と共に転勤のため淮河^{わい が}を航行している途中、舟の上で生まれたそうです。「この人はね、北宋の首都汴梁^{べんりょう}（今の開封）が女真族の金によって陥落する前に、嵐の中で生まれたんですよ。その翌年、北宋は滅亡しています。生まれからして象徴的ですね。」と植田先生。

父が論じた主戦論を聞いて育ち、自らも強い愛国心と対金強硬論を貫いた人生でした。29 歳のとき、科挙の第一段階の試験^{しんかい しんけん}にトップ合格したものの、これが運悪く権力者秦檜^{しんかい}の孫秦埴^{しんけん}よりも上位であったため、秦檜の横やりで落第の憂き目にあいます。つまり、これでエリートとしての出世の道を閉ざされてしまったのです。これを転機として陸游の苦難の道が始まるわけです。

さて〔卜算子〕^{ぼくさんし}と言うのは、楽曲の名称で、一般に〈詞牌〉^{ツープイ}と呼ばれるものです。「詠梅」は、

歌詞の内容です。「卜」も「算」も占いという意味ですが、元になった曲がその様な内容のものだったとも言われています。つまり旋律の題が〔卜算子〕というわけです。したがって楽曲の名称自体はこの作品の内容とは特に関係ありません。〔卜算子〕に限らず、各〈詞牌〉にはそれぞれ字数と平仄が決まっており、このルールに沿って沢山の作者により様々な内容の歌詞が作られています。

有名なところでは、毛沢東もこの〔卜算子〕「詠梅」を下敷きに一首呼んでいます。毛沢東は、文化大革命を起こす前、政治家として事実上の引退を迫られていた時期に、陸游のこの作品に自分の境遇を重ね合わせて奮起したわけですが、文革もさることながら、詩のレベルも、やはり陸游の詩には及ばないようです。

〈詞〉は前半と後半に分かれます。これが一般的なスタイルです。〔卜算子〕は前半も後半も以下のような平仄になります。

○の部分の平仄は自由です。陸游のこの作品も以下の平仄にピッタリ符合しています。

○仄仄平平

○仄平平仄

○仄平平仄仄平

○仄平平仄

bǔ suàn zǐ
〔卜 算 子〕yǒng méi
詠 梅lù yóu
陆 游yì wài duàn qiáo biān
驿 外 断 桥 边
jì mò kāi wú zhǔ
寂 寞 开 无 主

yǐ shì huáng hūn dú zì chóu
 已 是 黄 昏 独 自 愁
 gèng zhuó fēng hé yǔ
 更 著 风 和 雨
 wú yì kǔ zhēng chūn
 无 意 苦 争 春
 yī rèn qún fāng dù
 一 任 群 芳 妒
 líng luò chéng ní niǎn zuò chén
 零 落 成 泥 碾 作 尘
 zhǐ yǒu xiāng rú gù
 只 有 香 如 故

〈詞〉は前半と後半に分かれますので、意味もそれに合わせてみていきましょう。「詠梅」つまり梅を詠むという、この作品の内容を示す表題が副題としてついていますが、詩の中には梅の字は全く使われていません。まず、「驛」（駅）とは、政府機関の公文書を届ける馬と役人が休憩する駅舎のことです。その駅舎の向こうに壊れた橋があり、主のない梅の花が寂しそうに咲いている。すでに黄昏時で、それだけで心細いのさらに、雨が降り、風が吹いてきた。「无主」、つまり「主がない」とは、手入れする人がいないとも取れるし、愛でる人がいないとも言えるかもしれません。とにかく、夕暮れの風雨中、寂しげに花を咲かせた一株の梅の古木が鮮烈に浮かびあがります。

後半です。我こそは、と様々な花が咲き誇るのが春の景色というものだ。そんな春の花々が、真っ先に咲く梅を妬ましく思っている、放っておけばいい。春の花が咲く頃、梅の花は落ち、泥にまみれ、踏みつけられて塵になる。しかしそうなったとしても、香りだけは依然として残るのだ。後半の二句「零落、成泥、碾（踏まれて砕け）作塵（チリになる）」と時系列で花が土に還っていくまでの表現は実に生々しいですね。この表現に陸游が時の権力者から受け入れられずに、孤独の末、あちこち左遷させられる自分の境遇を重ねていると思うと、その感情は真に迫るものがあります。

そして最後は、どんなに踏みつけられ、たとえ我が身は塵と消えても、自分の誇りや信条、夢や希望は、梅の香りのように残るのだ！という陸游の雄叫びが聞こえてきます。

このように植田先生から作者の人生物語と詩の内容を解説いただいてから、読みの練習に入りました。最初は全体で音読してから一人一行ずつ、次に前半4行、後半4行と植田先生が参加者を指名していかれます。毎回たっぷり音読時間も取ってくださるこのクラスは、数ある漢詩講座の中でも、一人一人の参加意識が高まる講座ではないかと思えます。

さて、〈詞〉は宋の時代には、もちろん歌だったわけですが、今となっては現代中国語の声調で読むしかありません。「5文字の句と7文字の句がありますので、こういうのを長短句とも言うのですが、なんとなくもの悲しげなムードを出しますね。」と植田先生。「宋の時代は、どういう音色でどういう歌い方で、どんな風にこぶしを効かせたのかは、滅びてしまって伝わっていないんですよ。楽譜は部分的に残ってはいるものの当時の歌い方が分からない。今では現代風にアレンジした曲が何種類かCDとして市販されているようですが。中国は王朝交替があり、また異民族の支配もあつたりするので、意外と伝統が受け継がれにくいのです。それをうまーく残すのが日本ですね。楽譜も中国では失われたものが、日本に残っている場合もあります。但し〈詞〉というこのジャンルは、日本ではあまり普及しませんでした……」。

確かに、王朝が代わると、次の権力者に都合の良いように歴史は書き換えられ、前の王朝の文化も受け継がれにくいのでしょう。植田先生は常々、「日本は中国文化の冷凍庫である」と仰いますが、古いものを大切に受け継ぐという精神性は日本人の良いところであり、日本という土壌が果たしてきた役目でもあったように思い

ます。

私自身は中国人には、前に突き進んでいくエネルギーを感じますが、新しいものを創造したり、誰も歩いたことのない茨の道を開拓するには、それと同じくらい古いものを破壊していくパワーも必要なのかもしれないのかな、と感じることもあります。文化大革命などはその一例かも知れません。

中国を破壊と創造のエネルギーとすると、日本は保存と改良・改善のエネルギー。日本人と中国人の根本的な性質は相互補完関係にあつて、私個人としてはベストパートナーだと思っています。今後優秀な中国人に仕事を奪われる、という危惧もあるようですが、日本人は日本人の良さを自覚し、上手く中国人と仲良くしていけば良いと考えています。

さて、話は漢詩から逸れましたが、講座の最後に、陸游の絶筆として知られる「示兒」という詩も教えていただきました。陸游が亡くなる前に息子たちを呼び寄せて遺言とした七言絶句の詩です。

shì ér
示 兒
sǐ qù yuán zhī wàn shì kōng
死 去 元 知 万 事 空 ，
dàn bēi bú jiàn jiǔ zhōu tóng 。
但 悲 不 見 九 州 同 。
wáng shī běi dìng zhōng yuán rì
王 師 北 定 中 原 日 ，
jiā jì wú wàng gào nǎi wēng 。
家 祭 无 忘 告 乃 翁 。

意味はこうです。「死んだら、何も亡くなるということは分かっている。しかし、もし自分が死んだ後、金に占領された北方領土が奪還できたら、わが家の霊祭の折に必ず報告して欲しい」というものです。

「陸游の執念がこもっていますね。私もこんなこと言って死にたいですね（笑）」と植田先生。この詩からは堅物の官僚みたいな雰囲気伝わ

りますが、陸游はまた繊細な心を持つ人でもありました。彼の有名な〈詞〉の一つに、別れた愛妻を懐かしんだ作品があり、これも素敵な作品です。陸游は母方の従姉妹に当たる唐婉とうえんという女性と結婚しますが、この妻と大変仲が良かったそうです。しかし、彼女が子を生まないこと、彼女と結婚したあと家に不幸が続くと占い師に言われたという理由で、二人は離婚させられるのです。本当の理由は諸説があつてはっきりしませんが、いずれにしろ、昔は姑の力が絶大だったようです。「陸游はマザコンだったんですかねえ。奥さんのことが好きで仕方なかったのに、お母さんと嫁の仲が悪くて別れさせられたんですね。でもこれは封建時代には当たり前のことだったのかも知れません。家風に合わないという理由で離縁される、私も子供時代にこの類の話は何度か聞いたことがあります」と植田先生。

お互い別の人と結婚してからも陸游はずっと元の妻を忘れられませんでした。そして、元の妻唐婉とうえんと偶然に再会した時に詠んだ〈詞〉が残っています。〈詞牌〉の名は〔釵頭鳳〕。再会后間もなく、唐婉は病気で亡くなってしまふのですが、死ぬ前に同じ詞牌名の作品を作ってこれに唱和しています。私もこの二人の作品を読みましたが、綿々とした二人の愛が伝わってき切ないほどです。なお、この二人の悲恋物語は今では各種の芝居の演目にもなっています。芝居の場面には必ずこの歌が出てきますが、曲調はすべて演目に合わせてアレンジしたもので、もとの曲ではありません。

男性らしい、気骨の人と言われる陸游のまた別の一面ですね。天を仰いで嘆息する武人の後ろ姿が見えるようです。人間というのは実に様々な面があり、一人一人の心の奥には、他者には到底わからない人生があるんだなあ、と思ったのでした。

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑥）

高島敬明

事故に対するナイジェリア警察の、〈本人の不注意から起きた事故である〉との判断が下され本社への報告も終わり一応一区切りがついたので、日常の我々の健康管理のため日本から派遣されている医者の方を訪ねました。先生は本事故にずっと一緒に携わっておられただけに次のような話をされました。「私は真っ先に現場に駆けつけましたが、それはそれは目を背けるような大変な事故でした。そこでは T 班長がテキパキと指示しながら現場をキレイに片付けていましたが、大変立派でした。死亡した作業員と 5 日後と一緒に室蘭に帰国予定の仲間が泣きながら駆けつけて来ました。遠いアフリカの現場でこのような大事故が本人だけの責任であるかのように決着しましたが、こんなことでいいのでしょうか！ 日本では考えられないことです。」とやりきれない表情で話されました。

先生にいつもの作業員への診察治療のお礼を言って帰ろうとすると、「高島さん！」と呼び止められました。先生は唐突にナイジェリアの蛇の話を始められました。「この国の蛇は全て毒蛇とと思ってください。蛇の毒にも色々あり血液が固まっていくもの、体がしびれて来るものなどありますが、怖いのは神経性の毒を持ったやつです。中でも〈グリーンズネイク〉と、言って小指ほどの太さで長さが 20~30 cm 程度の深緑の小さな蛇で、地上水中どこにでもいるこの小さな蛇が最悪です。これに噛まれると 5 歩もたないと言われます。一二……五と数えるとパタッと倒れるのだそうです。」と教えていただきました。血清があってもこの蛇は間に合わないそうで、とにかく噛まれないようにするしかありません。

医務室を出てラゴスに帰る支度をして名古屋の作業員にお別れに行きました。大半の作業員が半年も前に到着した機器の仮置き場でトラックへの積み込み運搬作業をしていました。仮置き場では半年前に置かれた機器の間は草ぼうぼうで、機器番号の確認も草を掻き分け大変な苦勞をしながらやっておられました。私は皆さんにお別れの挨拶をするため集ま



クーラーの効いたビッグバスでの休息

ってもらいました。皆さんには、今回の事故処理がとにかく終わったことを告げ、来年には皆さんと一緒に日本に帰りましょう！と言いました。ようやく元気になった T 班長にも「一緒に帰るぞ！」と声を掛けました。彼は笑顔を作って私の手を握り返しました。先ほどの先生の毒蛇の話の話を皆さんに聞いてもらいましたが、やはり機器のケースを取ると草の中にその蛇がいるそうです。現地人はすっ飛んでいなくなりますが、駆除は日本人がするそうです。

飛行機のトラブルからカノー空港に急遽着陸し、そこからタクシーで 300km を 4 時間休みなく走って現場に到着してから早一週間が経ちました。色々なことが走馬灯のように思い出されながら巨大なカドナリファイナリー建設現場を離れカドナ空港へと向かいました。ラゴス空港に無事到着しエマニアル運転手に会うことが出来ました。ラゴスのキャンプに帰り早速 H マネージャーに報告をしました。問題解決を喜んでくれましたが、私の心中は複雑で悩んでいました。明日 S マネージャーに報告に行くと言われてました。

翌日事務所に着くと、当社の本社から私宛に通信文章が入っているとのことでした。それによると亡くなった方のご遺体は成田空港で当社建設担当の常務が出迎え、ご親族、相手の会社にも当方の非を認め丁寧に挨拶したとのことでした。私の電文が

意味不明だったとのことで役目が果たせず忸怩たる思いでしたが、これで良かったのだと思いました。本人の過失だけでなく当社の責任も反映した補償がご家族に支払われるとのことで、遠いアフリカの地で無念の最期を遂げたご本人の供養にもなると思いました。S マネージャーも訳の分からないナイジェリア国での日本人の処罰が無くて安心したと話されていました。この国での裁判となれば長期間行き来しなければなりませんし、費用も莫大になります。とにかく日本を遠く離れ異郷の地での事故対応はこれで終了し、これ以降は日本サイドの話になります。

〈これから何回かに分けて、日本では考えられないような出来事を書いて行こうと思います。ナイジェリアは本当に異郷の地でした。〉

キャンプ、ラゴス港、C 化工建設との単純な行き来で何か月かが過ぎました。キャンプは相変わらず大洋漁業から買っているエビの料理が大半を占めました。毎晩魚国の T 料理長に言われエビの背中の黒い筋を取る作業を何人かでやります。エビの食べたカスが溜まっているのだそうです。T さんはラゴス湾で取れたエビだから何を食べているか分からないと言っていました。日本大使館の 2 等書記官が水上スキーをしていてラゴス湾で行方不明になった時、懸命に捜索しましたが見つからず困り果てて懸賞金を付け新聞広告を出したそうです。すると翌日には 12 体の遺体が大使館に運ばれて来たといひます。こんな話はいくらでもあるのです。

カドナから帰ってきてしばらくしてから悲しい知らせが入って来ました。カドナの宿舎での毎夜の酒宴にお呼び頂いた T 建設の人のいい監督の C さんが亡くなりました。コンクリートの骨材が大量に無くなるとこぼしていました。C さんはある夜意を決して深夜資材置き場に 2 人で乗り込んだそうです。犯人のダンプカーを見つけ、彼はダンプの前に立ちはだかり車を止めようとしたのです。車は残酷にもそのままスピードを上げ C さんをひき殺して走り去ったとのことでした。私は会社を代表して電報を打ち、お悔やみを申し上げました。私が見たカドナでの棺の儀式が繰り返され、またご家族のことを思うと断腸の思いで悲しくて沈み込みました。

建設工事は終盤に差し掛かっていますが、まだまだラゴス港で荷揚げした、200t、300t の機器がカド

ナに送られていきます。工事が始まる前には国道など現場に通じる橋や地盤の弱い道路などはナイジェリア政府の要請で英国の会社が補強工事を施工しました。補修した後の道路や橋は何の心配もなく、イタリア製のゴールドホーファーというタイヤの多いムカデのような車に 300t、400t のものを積んで時速 60~70km の速度で現場まで運行しているのです(日本ではとても許されない速度です)。最後の工程に差し掛かった時、ラゴス市の国道の工事予定が突然入って来ました。当然使用する道路のルート変更を行い、新しいルートの補強をしなければなりません。我々の手で道路調査をして極力橋のないルートを選びましたが、ニジェール川の支流が多く、どうしても 6 つの橋を補強する必要があります。川幅は狭いのですが水量は比較的多い川でした。ラゴス市に話しても建設当時の設計図もなく、許容重量何トンの橋なのかも分かりません。橋の形態は鉄橋が 2 橋、コンクリート橋が 4 橋です。鉄の橋の補強方法は分かっていますが、コンクリート橋はコンクリートの中の配筋などが分からなければ非常に厄介です。とにかく小さな間隔でたくさん補強するしかありません。木材、H 型鋼などで人力とトラックに付いている小さなクレーンで作業を進めます。流れる川に 4 人の当社のベテラン作業員が腰まで水につかり作業をします。魚河岸に行けば店員が付いているような胸まである長靴を履いて作業をします。私は裸で短パンをはき、ロープを腰に結わえ橋の上で待機しています。私のロープの端っこは運転手のエマニエル大尉等何人かで待機するわけです。川の中の作業員は胸までの長靴を履いて橋を支える木材の基礎を固めるわけですが、ちょっとしたはずみで長靴に流れる水が大量に入り込みます。するともう体の復元は不可能で早い水の流れに流されます。下から悲鳴にも似た「係長う、係長う！」という声が聞こえると私の出番です。エマニエルと声を掛け合い水に飛び込みます。ロープを持って流される作業員まで懸命に泳ぐわけです。予め繋いでいた浮き輪に導き引き揚げます。それを何回も繰り返しました。炎天下ですから非常に疲れます。とうとう一人の犠牲者も出さずにやり遂げました。エマニエル大尉が私の顔の前につこりしながら親指を立てた拳を突き出しました。

(つづく)

▼いよいよ玉山登山口へ

昼食後、康橋ホテルに戻り、しばらくすると登山ガイドの小綿羊さんがワゴン車でやってきた。車はフォルクスワーゲンだ。小綿羊さんは57歳、それほど背が高いわけではないが、筋肉質でガッシリと引き締まった体だ。これまでに80回も玉山に登っているという。

ホテルを出発して1時間、高速道路を走って、嘉義の町で休憩。民俗文化館を見学した。嘉義は戦前の高校野球の映画「KANO」の舞台になった地域だ。1931年の夏、台湾代表で中等野球大会に出場した嘉義農林学校は初出場で何と決勝戦まで快進撃を続けた。中京商業との決勝戦は惜しくも敗れたが、この活躍は台湾全土に歓喜をもたらした。資料館の人にこの話をすると、やはりよく知っていた。この当時の嘉義農林の選手たちの雄姿は台湾の20元紙幣の図柄にもなっているほどだ。

さらに山岳道路を阿里山に向かう。途中にあったセブンイレブンで、2日間の昼食の食料を買い込む。午後5時30分、「山葵屋（わさびや）」民宿に着いた。台湾の観光地には、日本と同じように「民宿」が結構多い。もちろんホテルよりも安い。夕食後、リビングにあったカラオケ設備で、「♪青い山脈」「♪大阪ラブソディ」、テレサ・テンの歌などをみんなで歌い大いに盛りあがった。部屋はきれいで日本のペンションのようだ。ダブルベッドがふたつ。幸い、寝具が4人分あったので、男性はダブルベッド、女性は床で寝た。僕が一番寝つきが早かったようで、一頻り話した後、「寝ます」と言ってから1分と経たないうちにイビキが響いたという。快適なベッドで熟睡した。ちなみに寝た順番は①西岡、②浪花、③岩本、④高橋とのこと。最後に寝た高橋さんの証言だ。

▼さあ目指すは玉山山頂だ

翌日、4月24日は5:00起床、朝食後5:50に民宿を出発した。阿里山の山岳道路を奥深く入っていく。石山集落を抜けて、7:40に「東埔山荘」の表示がされた登山口の駐車場に着いた。登山の準備

をする。続々とバスやマイカーで駐車場がいっぱいになった。8:10、駐車場の向かい側にある舗装道の急坂を200mほど登る。警察署があった。ガイドが登山届を提出。続いてその隣に管理センターの建物。パスポートのチェックを受ける。屋内は玉山のビジターセンターになっている。日本語版の玉山案内地図もあった。手続きを済ませて、管理センターの送迎ワゴン車に乗り込む。7人ずつ次々と登山者を乗せて車が出ていく。10分ほど林道を走ると塔塔加（ととか）登山口に着いた。「玉山登山口」と刻まれた大きな石碑が立っていた。塔塔加は見晴らしのいい峠で、すでに標高は2610mだ。北アルプスでいえば蝶ヶ岳の山頂あたりか。

天気も上々だ。気分もいい。4人とも元気だ。8:50に歩き始めた。先頭はガイド。我々よりも相当重いザックを背負ったガイドだが、その足の運びはテンポよくしっかりと大地を踏みしめて歩く。あとに続く4人は、高橋、岩本、浪花、西岡の順だ。ガイドは後ろの4人のことなどあまり気にかけていないようだ。30分歩いて小休止。つぎの30分歩くと「モンロー亭」。2838mだ。東屋があり、50m先にトイレがある。このあたりは山の斜面が断崖になっていて、アメリカ人のモンロー氏がこの地の調査・探検にやってきたときに、足を滑らせて滑落死されたという。その名の由縁である。10:55玉山前峰分岐点。10数人のグループがいた。話しをするとアルパインツアーの一行だという。



玉山頂上からのご来光（浪花芳法氏撮影）



登頂記念写真（筆者は右から二人目）

ちなみにツアー料金を聞くと 24 万円とのこと。11:30 岩場がある地点で昼食休憩。シャクナゲの下で、カップラーメン、玉子、パン、バナナを食べる。山頂から下ってくる人たちとつぎつぎと交差する。樹林帯の樹木は台湾スギという。

午後は 12:50 白木林休憩所の東屋で小休止。東屋の手前にトイレあり。13:10 見上げると目がくらむような大障壁を通過。しばらくして岩本さんが「足がつる」と声をあげた。大したことはないようだ。なだらかな登山道が急斜面になった。拝雲山荘手前の難所だ。30 分ぐらい急斜面をあえぎながら登り、最後の 200 段の階段を登りきると小屋に着いた。小屋は標高 3402m。槍ヶ岳を超えた。時間は午後 4 時前だ。数年前に建て替えられた小屋は 2 階建て、茶色の外壁が小ざれいでシンプル。テラスもある。寝室は 8 室で寝床はカイコ棚の二段式だ。収容人員は 92 人。そのうち外国人枠は 24 人。5 人以下の外国人グループは 1 人の台湾人ガイドを付けなければいけない。

夕食は豚肉にスープ、野菜、ごはん。明日は夜中に出発するので、夕食後、早々に寝袋に入った。4 月 25 日、午前 1 時 30 分起床。しかし、ガイドは起きてこない。2 時に朝食。饅頭（まんとう）、ミルクティー、おかゆ。ようやくガイドも起きてきた。昨夜は星空だったが、今、外はガスがかかっている。寝袋をたたむのが



登頂記念写真（筆者は右から二人目）

結構手間取った。袋と一体型は力がある。

準備が整ったグループから順次小屋を出発していく。2:50、準備ができたガイドを先頭に僕らも出発した。小屋の間を通り抜け、木橋を渡ると登山道が伸びている。100 人近い登山者が、グループごとにほぼ一列になって、数珠つなぎで暗闇の中をヘッドランプで足元を照らして歩く。先頭から光の帯が連なっていた。適当な間隔で「小屋まで〇キロ／山頂まで〇キロ」の道標が立っている。緩やかだった道が、岩場とガレ場の登山道に変わっていく。小休止を繰り返すたびに抜きつ抜かれつの様相だ。ガスも次第に消えていった。暗かった周りが次第に明るくなっていき、ヘッドランプの灯が消えてゆく。夜明けが近い。「風口」という半ばトンネルのような場所を抜ける。風の強い場所という意味らしい。ガレ場、クサリ、階段が続く。北アルプスの槍・穂高のようだ。最後の急登 30 分を上り詰めて、5:20 に玉山主峰の最高所 3952m を踏んだ。体に高山病らしき兆候はない。先行の登山者で山頂はいっぱいだ。丁度、日の出の時間。雲の間から陽が昇った。

玉山主峰の石碑の前で、順番に写真を撮る。ぼくは持参した鯉のぼりを手に写真に納まった。

ドローンを組み立てて、飛ばしている登山者もいた。カメラが付いているのだろう。山頂にはゆっくりと小一時間ぐらいいて、6:20 に下山開始。慎重に下る。約 1 時間 30 分で拝雲山荘に戻ってきた。

▼登頂の感動と余韻を胸に下山

小屋で小休止のあと、8 時 30 分に小屋を後にした。もう気分はルンルンだ。あとは下るだけ。ガイドのピッチはなぜか速い。小屋から登山口までは 7.5 キロ。ほぼ 0.5 キロごとに標識があるが、0.5 キロを 15 分のペースで歩き通した。先行していたグループも小休止中に次々と追い抜き、途中で昼食タイムが入る予定だったが、それも飛ばしてひたすら歩き、登山口には 12 時 10 分に着いた。うまい具合に送

迎のワゴン車が間髪いれずやってきたので、そのまま乗り込み、ガイドのワゴン車がある駐車場まで一気に運んでくれた。

そのままガイドのワゴン車で登山口を後にして、一気に下界へと下って行った。午後2時ごろ、嘉義の町に着き、ガイドのなじみの飲食店に入った。ガイドは初めから昼食の場所を下山途中ではなく、この店で決めていたようだ。そのために一気に下山したのだ。

玉山登頂の打ち上げだ。空いたお腹にガツガツ食べた。さらに、台南市郊外のマンゴー店に寄ってきてくれてマンゴーアイスもご馳走してくれた。夕刻午後5時、無事に康橋ホテルに帰還した。ガイドさんありがとう。

台湾は実は山国だ。太平洋側は3000mを超える山々が何と200以上も連なっている巨大な壁である。玉山の魅力を言うのであれば「登山道や山小屋が混雑しないこと」「登山道やコースが明瞭なこと」が挙げられる。玉山は拝雲山荘の宿泊者上限(92名/1日)以外は入山を認めないので、日本の夏山はじめ、連休の山の混雑振りに辟易してしまった方には最高の山だ。さらに食事や寝具を持っていく必要がないのでザックも重たくない。コースが整備されていてまったく道迷いによる遭難の心配がないので安心だ。

▼台南から花蓮へ向かう

4月26日(金)、昨夜の打ち合わせで今後のツアー旅程を相談した結果、早朝の台湾鉄道に乗ることが一番となった。康橋ホテル、5:00起床、5:50タクシーで台南駅へ出発(85元は安い。約350円)、早すぎたおかげでホテルの朝食が食べられず。そ



花蓮の太魯閣溪谷 (左端が筆者)

れが残念。台南駅を6:30発の台湾鉄道に乗車。台湾の南から東へ向けて太平洋側を走る。台東の穀倉地帯、海岸沿いを走る。車窓の景色は日本の北陸を走っているみたい。11:49に花蓮駅に到着。花蓮は今年の4月中旬に地震のあったところだが、町なかはそんな感じは全くなく、大きな影響はないようだった。

駅前には観光タクシーの客引きの人がいっぱいいた。そんな一人、女性運転手の郭雪風さん(タクシー)に乗車した。夫の片桐秀明さんは日本人で民宿も経営。「地球の歩き方」に民宿の広告が掲載されている。(750元+オプション100元)。12:30、台湾有数の観光地「太魯閣(タロコ)溪谷」入り口の手前の食堂で昼食(まともな焼飯とスープ)。昼食後、最初の場所は「清水断崖(恋人たちの聖地?)」。切り立った断崖に立ち、海から岩に打ち寄せる波を見る。日本でいえば能登金剛か。太魯閣溪谷入り口に戻り、溪谷の入り口から慈母橋(大理石でできた橋、欄干には小さな獅子像がいっぱい並んでいる)を渡り、遊歩道の「緑水歩道」(全長2キロ往復1時間の溪谷散策コース)を歩く。燕子口(燕の巣が岸壁に穴のように点在)、鍾麗大断崖(断崖の岸壁が長く続く、空を見上げると岸壁で切り取られた青い空が台湾の地図のように見える)、長春祠(溪谷に道路を開削した工事で犠牲になった人たちを慰霊する)などを観光する。

帰路、運転手のなじみのお茶販売所でお茶をご馳走になる。18:00今日の宿舎、亜土都(アスター)ホテルに到着。海がすぐ近くの眺めがいいホテルだ。夕食は名物のワンタンスープを食べに行こうとまとまった。タクシーで有名店に行くと看板は「偏食の店」とある。ワンタンスープが偏食なのか?よくわからん。市内の夜市の散策へ。セブンイレブンで夕食とビールを買い込んで店の前で食べる。台湾にこれほどセブンイレブンが進出しているとは驚きだ。南国・台湾の夜が静かに更けてゆく。(続く)

胡雪岩を知っていますか？

後藤 芳昭

中国の歴史上、商業界においては二人の聖人がおり、一人は「陶朱公」、もう一人は「胡雪岩」と言われています。「陶朱公」とは越王勾踐こうせんを補佐し呉王夫差ふさを打ち負かした「范蠡はんれい」(注①)のことで、その後ただちに官界から商業界に転身をはかり巨万の富を築き上げました。彼は自ら「陶朱公」と名乗り、当地の人々は彼を「財神」と尊びました。なぜ陶という姓を名乗ったかについては定かではありませんが、山東省の定陶の地で商売をはじめ富を築いたからかもしれません。

一方の「胡雪岩」(雪巖とも)こせつがんですが、彼は清朝末期の非常に優れた商人で、人々から「商聖」と尊称されていました。ところが「范蠡」とは逆に商業界から政界に転身をはかりましたが、最終的には一敗地にまみれ悲惨な最期を迎えます。

なぜそのような結末を迎えたのか、その過程を追いかけて彼を紹介していこうと思います。内容は曾仕強・台湾師範大学教授のテキスト「胡雪岩的啓示」(陝西師範大学出版社)を使っただけの要約ですが、まずはこのテキストとの出会いを紹介します。

私は2009年の定年退職後、厦門大学アモイへ半年間留学に行きました。その際、CCTV(中国のNHKに相当するテレビ局)のいろいろなジャンルの専門

家による講義番組である「百家講壇」で、「易経的奥秘」のテーマを曾仕強教授が講義されていました。もちろん字幕付きです。それが面白くてテキストを買いに書店に行ったところ、同教授著の前述の本が目につきました。早速購入し厦門滞在中に周囲の中国人にも助けてもらいながら読了しま

した。私はこの時初めて胡雪岩という人物を知りましたが中国と中国人を理解し、学ぶ良い材料だと思いました。

胡雪岩は、1823年に生まれ1885年に62歳で亡くなっています。安徽省南部の績溪故里村(宣城市)の貧困家庭に生まれました。父母の家訓に恵まれ、一生に及ぶ基本的な修養を身に付けます。以下箇条書きにテキストに沿って要約したものを書いていきます。彼が13歳になったところからです。彼の飛躍へのス



胡雪岩肖像(香港版ウィキペディアから)

タートです。

◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷

- ▲家計の助けになるよう、放牛の仕事をしてきた時のこと、疲れて道端の亭で休もうとした。その時忘れ物の風呂敷包みを発見した。
- ▲その取扱い方は、まず近くの草むらにその風呂敷包みを埋めた。
- ▲そしてひたすら持ち主が現場に戻るのを待つ。
- ▲落とし主が現れたが慎重に本人確認をする。
- ▲一切の謝礼を拒否。その対応を見て、落とし

主は放牛の仕事よりも家の雑穀商で働くよう勧める。

▲しかしその場で即答を避け、家に帰って母と相談すると母は了承する。そしてその雑穀商で働くようになる。

▲その後は、そこでの勤勉さを買われ、次は、町の大雑穀商に転職する。

▲そこでも本領を發揮し、店主から是非いて欲しい人物に成長する。

▲そしてその店主から、杭州の為替商を勧められる。

▲為替商をまじめに勤め上げ、資金を蓄え着実にレベルアップする。

◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷

次は25歳の時からの話です。

▲人生の転換点となる同世代の「王有齡」(注②)と友達になり、当時苦境にあった「王有齡」に資金援助していく。

▲その結果、王は読書人(注③)としての官吏の道を取得し、海運を担当し後に湖州(浙江省・太湖の南岸に位置する地級市)の知府(注④)、さらに浙江巡撫となる。

▲一方、胡雪岩も為替商の大店主となり、湖州に分店を開いた。

▲位の上がっていった王は、税金を徴収し始めるが役所に置いておけないので、為替商の胡に預けることになった。

▲湖州は、浙江省の蚕糸の産地であり輸送で莫大な利益を上げ、官民ともに利相通じることになった。

▲その後、胡は当時新疆(しんきょう)を取り戻す任に当たっていた、清朝政府の「左宗棠」(注⑤)を財政面で援助し、清朝政府のために外国の銀行に貸し出しを行った。



『胡雪岩の啓示』陝西師範大学出版社(2008年)

筆者所蔵



著者の曾仕強教授(1935-2018年)

(香港版ウィキペディアから)

▲西太后から「^{おうほう}黄袍馬褂」(注⑥)を下賜され、商人でありながら最高の官位を与えられ、人々から「今を羽ばたく最高の商人」と称賛された。

▲胡は、母の命で杭州郊外に「^{こけいようどう}胡慶余堂」(注⑦)を建て、「真不二价」(当店で扱う薬に嘘偽りはない)と記した扁額を掲げ、疫病の流行時には人々に薬や粥を振る舞い「胡大善人」とも称された。

▲しかるにたった3年という短い間に、「李鴻章」(注⑧)は最大の政敵である左宗棠を追い詰めるため、先ず資金源である胡を倒すことにした。そして執拗にあらゆる手を使い左の政治資金の出所を追求し胡が外国銀行への違法な貸し

出しによる金利を得たことを突き止め西太后に注進した。今度は胡は西太后の怒りに触れ破産に追い込まれ、わずか 62 歳で悶々として亡くなった。

◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷◁・▷

以上、彼の生い立ち、成功に至る過程、そして没落に至るまでを簡記しましたが彼がどのような家庭環境で育ったか、どんなきっかけで人を助け成功していったのか、どのような働き方をして抜擢されたか、どのように一生の友達を持ったか、そしてどのようにして一敗地にまみれたか、など曾教授のパラグラフごとの「啓示」を読みながら納得したり、疑問を抱いたりして、清末の世情や中国人の処世術を学びました。厦門での留学の心に残る「胡雪岩」との出会いでした。

(続く)

■注釈

- ①**范蠡**：生没年、出身地とも不詳。越王勾踐に仕え、勾踐を春秋五覇に数えられるまでにした最大の功労者。呉王夫差を打ち負かし有頂天になっている勾踐を見て友人へ手紙で「狡兔死して走狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵る」と書いて越を去ったと言われる。
- ②**王有齡**：(1810～1861年)福建省出身。挙人となったが進士となることができず、胡雪岩の出資の下浙江塩大使の官職を金で買う。
- ③**読書人**：士大夫(科挙官僚)をいう。
- ④**知府**：地方行政区画である「府」の長官をいう。
- ⑤**左宗棠**：(1812年～1885年)湖南省出身。清朝末期の著名な大臣。太平天国の乱の鎮圧に活躍し、洋務派官僚としても有名。
- ⑥**黄袍馬褂**：高貴の人が着る黄色地の長い服
- ⑦**胡慶余堂**：中国の老舗の薬局、製薬会社・問診所。1874年に創業。
- ⑧**李鴻章**：(1823～1901年)安徽省出身。清代の政治家。洋務派運動を推進し、清朝後期の外交を担い清朝の立て直しに尽力。日清戦争時、下関条約で清側の全権大使となり、調印したことでも知られる。

*各注釈はネット他から引用。なお本文中の曾仕強台湾師範大学教授は、2018年逝去された。

央视网视频 > 百家讲坛《胡雪岩的启示》> 《胡雪岩的启示》第1集 德行定终生



曾仕強教授講演、「易經的奧秘『胡雪岩的啓示』」は CCTV のホームページから閲覧できます
<http://tv.cntv.cn/video/C37788/63e3e77d65de4e7bb83333905ca2e0dc>

詮索好き旅行者の私が、これは中国的で面白いぞと感じた風景をご紹介します。中国人や、中国通の人たちには当たり前の景色だとは思いますが。



食器消毒サービス：以前（今でもか？）中国のレストランで、食器が配られると、食器に付着した水滴や、汚れを拭き取るため、茶の湯の作法のように紙で食器を回して拭きました。近年は上の写真のように箸と食器を包んだ物が出されます。これは全中国的なのでしょうか？



餐具消毒服務：左の梱包を広げた紙です。上部の「緑芝宝」はブランド名。「食器洗い配送工場」ともいえるしくみのようです。ネットで調べた職種では「消毒櫃公司」と書いてありました。衛生的見地から政府指導でこのような仕組みができたようです。経費はいくらかかるのでしょうか？ お店の人がどう思っているかは知りたいところです。「保証期間 10 日間」とはおもしろいですね。



水カマニ車：これは、9月号の表紙写真を撮った「梅里雪山」の麓の村で見た「水カマニ車」。写真ではよく解りませんが、勢いよくクルクルと回っていました。水力なら発電をした方が良く思っているのは、罰当たりな私だけでしょうか？ 水の豊富な地方なら同様なマニ車がほかでもありそうです。

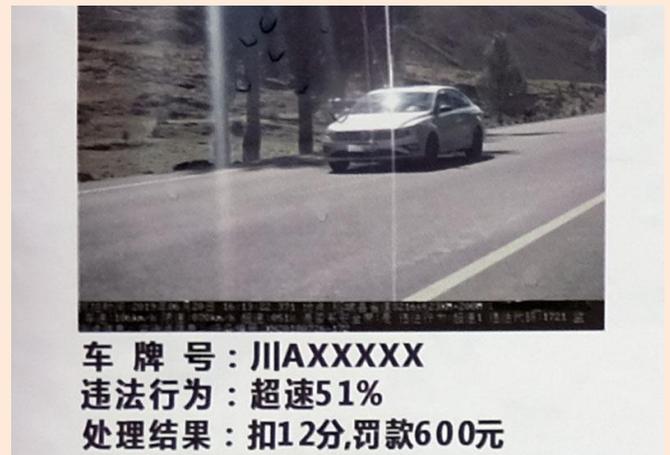


カウンター付トイレ：雲南省の徳欽にある「梅里雪山」展望台のトイレ。入口すぐに男女に別れるホールが有り、その奥に電光式の配置図。右端にはなぜか入場者のカウント覧がある。何か意味があるのか？ 17時現在、男70、女31人だとさ。個室数が男女同じはなぜ？ 中国ではそうなの？ 個室に監視カメラはがないとよいですね。



■中国一綺麗なトイレに「蜘蛛」が：またまたトイレの話ですみません。観光地、麗江「古城」にある公衆トイレです。私は中国一綺麗なトイレと感じました。どこもピカピカで五つ星のホテルの並みです。黄色の服の女性は清掃員で、他に数人いました。雨の日だったのでカッパを着ています。上の写真は入口を入ったところで、2階は女性用になっていました。男性用は階段の手前を右に曲

がります。私が入ってみると「アサガオ」が左右の壁に整然と並んで、床の水濡れも有りません。ここが中国かと信じられません。いざ、ここに来た目的を遂げようとしてアサガオに向かうと違和感があります。「蜘蛛」がいるではありませんか！ぎょつとしました。顔を近づけても動きません。もしかしてと、他の並んだアサガオを見れば全ての内側に蜘蛛がいました。アサガオの模様でした。



■「晒し車」看板：上図は本号表紙と同じ「稻城」の公共広場にあった看板です。速度違反で捕まえた車を掲示しています。「釣果」を誇るかのようでおかしいです。表題が「超速違法曝光欄」とあり、晒し車ですね。右上図は赤線部分の拡大です。「車牌号」とはナンバーのことで、写真ではぼかしていました。「罰款」は罰金か……と中国語の勉強になりました。「扣12分」はお説教の経過時間でしょうか？他の大部分の車は超速20%程度

で罰金は100元、「扣3分」がほとんどでした。写真の背景が同じなのでここに「ねずみ取り」があるようです。「罰款」600元は2台だけでした。

隣に同様の看板があって、「乱停乱放違法曝光欄」書いてありました。駐車違反の事のように。写真を見ると路上駐車がほとんどで、道路端にきれいに駐車しても「乱停乱放」になってしまうようです。罰金は100元でした。

(いずれも2019年7月、四川・雲南省で撮影)

【活動報告】‘わんりい’料理の会—9月22日（日）

「手作り月餅の会」和やかに

川崎市・麻生市民館

講師：有為楠君代

9月22日（日）、中秋節から約10日遅れですが、「手作り月餅の会」が開かれました。場所は、川崎市・麻生市民館の料理室です。新年会をはじめ各種の料理教室でお世話になっている会場です。今回は皆昼食を済ませて集合し、12時半からスタートしました。参加者は10名ですが、料理教室への参加の常連さんが多く、和気藹々の中で作業が始まりました。講師はわんりい副代表の有為楠君代さんで、本人が作成したレシピを配り「皮」の作り方から入りました。通常、皮は薄力粉にオリゴ糖、サラダ油、かんすい等を加えて練って行きますが、時間の関係で本日は強力粉での実演となりました。講師の机の周りに集合し、手先を見ながらレシピに鉛筆で書き加えたりする人も。実際には今日の人数分は講師達が前日薄力粉で作ったものを使用しました。

次に「餡」です。講師から「小豆餡」と「木の実餡」の二種類の作成実演があり、その後2テーブルに分かれて取り掛かりました。「餡」ができるとようやく月餅の型に入れて行きます。講師の手つきを見ると簡単そうに見えますが、いざ取り掛かると初めて作る人は意外と難しく、型に合わせる花の絵の蓋を逆に取り付けたり力加減がうまく行かなかったりで四苦八苦。しかし時間が経つにつれて次第にコツを覚え、綺麗な花模様の付いた月餅が型から押し出されると一端の芸術家になった気分もして来ます。オーブンで焼きあがった月餅を見るとホッと一安心です。

それらを別のテーブルに並べて皆で至福のおしゃべりタイムが始まりました。「この月餅は形が変だから〇〇さんの作ったものよね！」だの「これは少し焼き過ぎて固いわね！」などとお互い好き勝手なことを言いながら今日の快い疲れを癒していました。やはり中秋節には月餅が一番似合いますね。皆で後片付けをして午後4時半散会しました。



【中国の笑い話】43「365夜笑話」より

▲第148話 個人的計算

算数の先生「ここに梨が10個あります。6個食べてしまうと、残りは幾つでしょう」

食いしん坊の生徒「僕だったら残さずに全部食べてしまいます！」

第149話 どっちが大きい(すごい)?

子供が父親に訊きました。

子ども「1と20を比べたらどちらの数が多いの？」

父親「そりゃあ20の方が大きいに決まっているよ」

子ども「じゃあ、僕は算数の試験で20番だったけれど、1番より良かったんだね！」

第150話 例外

算数の時間に王先生が言いました。

先生「掛け算の答えは、足し算の答より大きいです」

李明「先生、それは違います！」

先生「どうして違うんだい？」

李明「1足す1は2でしょ。でも1掛ける1は1です。1は2よりも小さいから、掛け算の答は足し算の答よりも小さいです」

(有為楠君代 訳)



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これだと思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

▼10月の定例会

10月14日(祝) 13:30~

三輪センター第三会議室

▼11月号おたより発送日

10月31日(木) 10:30~ 三輪センター
第二・第三会議室 (弁当持参)

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎しています

年会費:1500円 入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい

途中入会の方には会費の割引があります。

下記へお問い合わせください。

問合せ:044-986-4195 (寺西)

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

①年10回、会報誌‘わんりい’を送付

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しいカラー版‘わんりい’をお送りします。こちらは無料です。

◆町田国際交流センター(町田市民フォーラム4F)、町田生涯学習センター(109ビル6F)、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

‘わんりい’247号の主な目次

寺子屋・四字成語(26)刮目相看……………	2
論語断片(40)群して覚せず……………	3
「遼陽」という街(2)……………	4
「漢詩の会」(33)陸游の卜算子「詠梅」……………	6
海外出張の思い出(ナイジェリア編⑥)……………	8
台湾一周&玉山登山ツアーレポート②……………	11
胡雪岩を知っていますか?……………	14
中国的街角風景……………	17
〈活動報告〉「手作り月餅の会」和やかに……………	19
中国の笑い話(43)……………	20